❶❷

❶大正4年改築が完了した東京顕微鏡院新院舎（神田小川町）。翌年の大正5年に、創立25周年兼改築落成記念会が開催され、安達峰一郎が祝辞を述べました。❷椿吉の父、元長の喜寿、母ひさの古稀の祝賀記念の写真。上段中央が椿吉、上段左が彌十。

遠山椿吉と安達峰一郎

椿吉の弟「彌十（やじゅう）」と安達峰一郎とは竹馬の友

国際司法官の安達峰一郎にとって同郷の衛生学者、医学博士遠山椿吉は12歳年上の先輩でした。家も近く、高楯の安達は遠山の弟・彌十とは同級生で、毎日大手町の遠山の家に彌十を迎えに行き学校に一緒に通っていました。椿吉の弟と竹馬の友だった峰一郎は、椿吉が設立した東京顕微鏡院の創立25年周年兼改築落成記念祝賀会（大正5年）で心温まる祝辞を述べています。

峰一郎は椿吉を、同郷の偉大な博士として尊敬

「…我が敬愛する遠山博士は、我と同郷の方でございまして、其先躍の最も偉大なるものの一人でございます。…（原文のまま）」祝辞の冒頭、椿吉を紹介する行で、峰一郎は椿吉を同郷の偉大な人物の一人であると誇らし気に語り、椿吉を博士として子供心に尊敬しながら、その後何十年も遠山の消息を追っていた心情をも語っています。そして、峰一郎は当時自分がメキシコ特命全権公使で、顕微鏡学に関係がないにも拘わらず参列した理由を3つ挙げています。

1つ目に、東京顕微鏡院の設立が、故郷山辺町にとっても誇りで尊敬に値すること。2つ目に、民間の研究所として設備を整備し、国の発展に寄与するであろうということ。3つ目に、自分の肝臓障害が顕微鏡により特定され、顕微鏡研究のおかげで療法を発見し快方に向かったこと。これらを述べ、峰一郎はその祝辞の最後に、自分は「新しき第二の生活」を得ることができた喜びを語っています。

また、椿吉自身も大病を患い、その病が全快したことを知らせる新聞記事を読んだ峰一郎は、自分と同じように「第二番の生活の一頁を為すに違ひない」と、真情あふれる言葉で結んでいます。